





卷之二十九

文明十八年正月

102  
2

百二

寺社雜事記 附院家

四百三

御内閣文庫  
御内閣文庫  
御内閣文庫  
御内閣文庫

第百十五號

赤字

寺社雜事記

村院家



文明十六年丙正月一日申朝夕而畢膳

省令解之是二十三年

用白氏長者奏不改平

豐後國大作之政覽

折弱為法縣御謹

上奏請取此不折充滿物

寺之廢舊奉行儀事

折弱為法縣御謹

李考寧林摺弱御事貢

布舊行事一

集錄

譽

既迄則為大考并傳

御書

布舊行事一

大考上書竟方略

卷五

102  
5

東山入道行

归事未办布有行

官教在焉舊江長及三軍

天下無事平國五兵全幸祐其皇承所懷

所望西三壁齊重其人

弟送大保之行

跋

一日所作手書也志  
丁未一歲予之元年

一小歲口至一加國初

一遇而得游于斯  
唱者序之甚之以自為之歌因是泛平故  
以是名之矣

一之三月の日月三秋音可  
詠之之不以不歌之

一而能吟相行

102  
b

二

一 周ニモナシノハ、命留テシ。

一 腹立事ト一物也

一 有事ニシテ物也

一 有事ニシテ物也

三

一 周ニモナシノハ、命留テシ。

一 周ニモナシノハ、命留テシ。

一 周ニモナシノハ、命留テシ。

四

一 大言無事也。事無事也。

一 無事也。事無事也。

一 無事也。事無事也。

一 無事也。事無事也。

五

一 菩薩前

一 ひきり入道 一 水道

字

一 丹波守公義

一 別名吉野尊

一 景雲寺主

一 古事記序

一 高田市 稲垣

一 多喜村

一 佐野守

一 丹波守

一 丹波守

字

一 丹波守

一 丹波守

高甲寅書

102  
9

赤井行丈 携 三天 番主

相馬行者於持請事與

一傳文旨不曉之謂未三日取  
中以爲許為也。不見于年號同  
也。是行者不取也。上言也。下言

八

一賜予

一四里行者謂御使將軍也。

平手行者謂御使將軍也。皆是  
御大物用。所用。行者。謂御使將

一三口見。這神

一內山行者。謂御使將軍也。謂

一浦隱也。或也。并也。也。

一背行者。謂御使將軍也。也。

一至行者。謂御使將軍也。也。

新編和漢集

一至平清多行之

佐用

森

一江考水事三在水元二年正月  
叶小源水事水事水事

一叶小源水事水事水事  
也水事水事水事  
也水事水事水事

古

一皆是水事水事水事

一通釋往來水事水事水事

一通一年水事

一通水事水事水事  
也水事水事水事  
也水事水事水事

辰立水事水事水事

ナニトモアリ

一海一羽子也

一  
千  
九  
百  
零  
九  
年  
一  
月  
一  
日  
于  
此  
作  
成  
于  
此  
作  
成

校讎大集

十一  
卷下

一  
之  
一  
也  
之  
也

卷之三

卷之三

一  
三月廿二日午後一時即到寶華山  
先至佛殿拜了一拜是午後二時半  
到萬象寺一處石室中見有大石碑  
題名曰萬象寺碑記其文甚古  
碑之左側有石碑一通題名曰  
萬象寺碑記其文甚古  
碑之右側有石碑一通題名曰  
萬象寺碑記其文甚古

102  
13

伏虎 沈有容  
行在南京  
壬申年夏  
月  
沈有容書

卷之六

一二箇月後、山内  
にて、かじの名古川村、  
近川村、清瀬、三ヶ所に  
傳來也。

國立公文書館  
National Archives of Japan

# 國立公文書館 National Archives of Japan

國立公文書館  
National Archives of Japan

是れ

雅集

博一

僕内

常三

吉壁

尚六

宣秉

板舟

彦方

僅姫

彦林

第一病

大源

第二病

大源

一叶

大源

一病

大源

一病

大源

一金

大源

大亨

大源

一千九百零六年正月

大源

一五十九年正月廿二日

大源

102  
17

幼時より、一ノ名は「萬葉」。萬葉の父は、土屋の後裔。  
三國志三十六人子平氏而年  
有之。母を一介の爲めに、御門下に就  
打務。之以月歿也。一劫のあつて、一往三年  
立候。方見テナ人、立見テ方極。既に  
老々、無事九十九歳にて歿す。内一役  
寺内着。之を御二年。人、古事記之。  
考究。考究。考究。考究。考究。考究。  
考究。考究。考究。考究。考究。考究。

102  
18

國立公文書館  
National Archives of Japan

國立公文書館  
National Archives of Japan

102  
19

國立公文書館  
National Archives of Japan

國立公文書館  
National Archives of Japan

102.  
20

102.  
20

十一

水東先生集卷之三

一  
物の是れ今、御沙へるは、不可云々  
其處は、トモリ、三脚、  
二、第三、ナシ。

卷之三

一  
因  
之  
不  
可  
否  
也  
若  
是  
則  
不  
可  
以  
不  
知  
其  
事  
情

一章弘法院二十九年在加賀國立寺  
三

御内書手記  
元和二年正月  
中興

吉原也。前田は、火事の後、元氣で古事記  
を書いた。因爲に、其の前、成瀬源兵衛、  
が、火事の際に、水を撒いて、火を止めた  
ので、その恩を報す。源兵衛は、火事の後、  
火事の原因を、吉原の火事と見なして、  
吉原を殺した。吉原は、死んで、死んだ。

وَلِلّٰهِ الْحُكْمُ وَالْحُكْمُ  
لِلّٰهِ الْعَلِيِّ الْعَلِيِّ

2. 1870. 10. 25. 10. 25. 10. 25.

卷之三

102  
21

一浪一坐りておまかせ  
一柱手の文字は手とおちて  
一音の沙汰の事、手筋三  
三事の筋や五事の事、獨特の  
三事、清の事、待の事、沙汰の事  
立の事、居候の事、とおちて五事の事  
立の事、沙汰の事、沙汰の事、沙汰の事  
沙汰の事、沙汰の事、沙汰の事

元祐丙子  
一歲嘗深憂之。方欲以爲急務。而事變  
日不一  
一湧于平生。代聖人之所為也。上因  
之。而

一  
宣部設樂以備其事。每當  
有大禮事，則遣樂官十二人，  
持鼓、鑼、磬、瑟、琴、瑟、笙、箏、  
笛、管、絃、簫等樂器，以備其用。  
其餘樂器，則置於宮中，以備  
其時之用。其餘樂器，則置於宮中，以備  
其時之用。

102  
22

102  
22

三

۱۰۷

廿三

七十五年後始て大蔵百名以下行ひ下りて是の後  
は年々泉川彦根より每年三百石を内に所の物事小  
三役者にてうそと申候るやうれど云ふ事  
用意の如きは其の内に申候る事と申す  
不仕合の事もあらず清野年秋吉候る事と申す  
事とては事無く相手を人間遣し等がて止む  
下りゆかぬ事とては二事共是れと大體下り

九時以降は外の事務で忙しくて、二度も  
お詫びの言葉を大変うるさい態度で受け取  
られました。お詫びの言葉を二度も受け取  
られたことは、これまでの経験では初めてで、

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十

中華書局影印

102  
23

此前於年中事事無事  
舊事也。今年之題詩上所記

其事

一千平上諸事。近般亦無事  
記載。新舊詩也。古文亦  
有事。是第其立詩之末。舊事  
多也。其事。其事。其事。

而事也。於事。於事。於事。  
うれしき。徳事。徳事。徳事。

是事。是事。是事。

一月二年事。一月二年事。

内事。内事。内事。内事。内事。

内事。内事。内事。内事。内事。

内事。内事。内事。内事。内事。

其事。其事。其事。其事。其事。

其事。

102  
24

他家之物亦多是也。凡一九

新江の年月日是日午夜  
元亨中興事之善下人名可也

卷之三

卷之三

卷之三

之能少有也。故其用事者，必各取其  
所好，以成其私焉。

多者高之以仰止者也。故曰：「仰之彌高，瞻之彌深。」

身不見玉以爲其成父之又  
以爲西車司之石卒將也布

西本寺一月春節中  
の事は大正元年一月九日  
の事也

力す。年上の元老院

五法の事務を勿論、一時

卷之三

多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜

多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜

一  
多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜

多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜

多喜

多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜

多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜

多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜

多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜

多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜

多喜

多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜

多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜

多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜

多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜

多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜多喜

102  
26.

利り本年合の八月に御宝自注古教定  
里坐下行之至吉文明為年以此の嘉慶  
ノ御坐少室御用宣化奉爲御鉢來可  
高井外大國少之同此後將下の事  
考相尋有難事大株松之古文  
知し可者多蒙以是之御鉢市打久藏  
内之年一着以又以御鉢市打久藏  
同上御鉢市打久藏之月此也  
參奉石力代り火木根參下火木根  
第下火木根參下火木根參下火木根

近因卷中事多就其本末之故  
亦復不外此也第  
是年中之名中人以之為外之用主  
事之者多也而知者少也行方  
自注云也之定之於外大抵不外  
有也下多云而之名也以之半一  
之也之多也之品也之多也行方  
中多也也之也

之而子之年三十有二矣  
處士者其號也

行格列  
表列  
圖列

102  
27

行  
列

卷之三

卷之三

宋子

卷之三

卷之三

卷之三

一  
卷三

102  
28

大内少輔の事に付く  
其の事に付く

十萬英里の事

其の事

其の事に付く

其の事に付く

其の事に付く

其の事

其の事に付く

其の事に付く

其の事に付く

其の事に付く

其の事に付く

其の事に付く

其の事に付く

其の事に付く

二月一日

一 潤毛仁王母在大法不若是予

并言事大法法修于云

大修三人

信三日

將修三天

大修

加布有

夢作不

赤文

注立夏之

木外十丈

相加三丈

華華子人

注大修事不令口相加第一

一

一 支廿多發者大而入近者之蘿也

初言是節

天升名等者

一 貼界石元及事下同也

行公事

一 諸事之多

舊名也

一 諸事之多

舊名也

102  
30

一 喜多川の事

喜多川の事

喜多川の事

一 喜多川の事

喜多川の事

喜多川の事

喜多川の事

一 喜多川の事

喜多川の事

喜多川の事

喜多川の事

一 喜多川の事

三。り葉東。

102  
31

一酒を引くや。當は未だ新茶

一まろ出づ。少く御代が能作

一テシヨリ、持てて下す。

一

一此有るすしの事。朝例。

一前アミタ

一此多手に續て文書附

一酒を引くや。少く御代

一希カミ是時併てある事多

一

一此有るすしの事。

一

一此有るすしの事。

一

一

六  
日

02  
32

卷之三

102  
33

事ノ四段

幕

三段

少校第 六段以降

一金多又ナリナシ

事ノ三段

一過二段

一不為而廢事

一金鷲毛之流事

一不為而廢事

一金鷲毛之流事

事ノ二段

事ノ一段

事ノ二段

事ノ三段

事ノ四段

事ノ五段

事ノ六段

夏文ひがし  
宣室せんじき

宣室せんじき  
宿命しゆめい

宿命しゆめい  
宿命しゆめい

茶茶ぢぢ  
茶茶ぢぢ

102  
35

5

Chancery

萬葉集卷之三

萬葉集  
卷之三  
舞田

卷之三

卷之三

萬物之靈一毫毛無失也。已而以爲不足。  
四年，又爲一那羅天王作佛事。

伊川先生集卷之三

卷之三

之言事事皆可取  
其後又以爲人所知  
故不復用

本草綱目卷之三

十一

三  
多  
金  
子  
一  
丁

まことに  
おもてなしの心  
おもてなしの心

A decorative illustration at the top of the page, featuring a stylized floral or foliate design in black ink.

空手道

102  
36

一。口宣法行勢。主也。事也。

多々。口宣行會。

釋義。主觀行會。事也。事也。

後學者。不學前人。而行之。

因。承。此。而。行。之。無。力。

而。此。之。行。者。與。前。行。者。

一。主。也。口。宣。行。勢。也。事。也。

釋。義。主。觀。行。會。事。也。事。也。

二。口。宣。

真。宗。行。

三。口。宣。行。會。

一。詔。毛。口。宣。行。勢。事。也。事。也。

主。觀。行。會。事。也。事。也。

一。背。中。行。口。宣。事。也。事。也。

大。事。

口。宣。

口。宣。

口。宣。

三。

一 沢一丸子也

一 次呑毛豆枝豆 宗井

一 謂行下毛豆之毛豆之毛豆之毛豆

一 番り仕事

一 与上一九百四十毛豆之毛豆

一 食酒水

一 用多毛豆

一 飲酒水

一 三毛豆之毛豆之毛豆之毛豆

一 大豆毛豆

一 廣澤平諸毛豆之毛豆

一 大豆毛豆之毛豆之毛豆之毛豆

一 佐野毛豆之毛豆之毛豆之毛豆

一 佐野毛豆之毛豆之毛豆之毛豆

ナニヨ

102  
38

一 まくはくの事書を合公卿  
おほむらう主へんに半改化乞  
義理との事とぞ申り

一 並法を申り

通フハモ

並法は既に承知申候

寄りセリ也。此日馬鹿

一 江路を申す

坐前詔上於事。是れ經り作一書

一 ちく

一 事書を申す。是れ御書。一

大口見事

一 事書を申す。是れ

一 事書を申す。是れ

一 事書を申す。是れ

一 事書を申す。是れ

す

一 里一木ノ印 ナクはよ

一 爰州ニシキタリ 一法よ

一 爰州義事事役仕事内事

一 爰州義事事役仕事内事

一 里の事方川西 まよ

一 が事事や様所と引ゆ

卷之三

102  
40

四

文にシテリ然れど、此れと通  
合せ事の如きは、う又あひ得、」  
之の如く、而て「屏風を以て割る  
所は、可否西川、北に三井、うり鬼  
舟共川、北に三井、東に松井、」  
奉見相上、表す御三井、之はたまし  
北口、吉田人、今、そ、在、九十三度、  
也、七、八、月、御、御、御、御、御、御、  
入道院の天、三人、いが、う、御、御、  
御、御、御、御、御、御、御、御、御、

卷之三

102  
41

既、其事多々ある事、  
席間も又、之を事に、事有りて  
之を、相圖る事無事、  
其事の事無事、

大吉、

一、吉の事、一、吉の事、去作、

吉の事、一、吉の事、

一、吉の事、一、吉の事、

等、等、等、等、等、等、

相圖る事、其事、其事、其事、

其事、其事、其事、

其事、其事、其事、

一、吉の事、一、吉の事、

吉の事、吉の事、吉の事、

中院正義、

平素より毛豆の販賣

ナロ

一 延喜二年九月一號奉書  
一 ト喜多ノ事前御用御内事  
樓子方店只の不一等事  
作、

佐家

傳烽流信、長慶書、  
傳烽流信、長慶書、

右法定明年三月之日、  
文明天年二月之日、  
傳烽流信、長慶書、

別事、延喜二年九月一號奉書

大義傳烽流信、長慶書、

鎌野政遠傳烽流信、

一 到本藏、不以是時、  
清宣ノ事、毛豆の販賣

一

102  
43

すりぬるを可と考へ得一物れあ  
國王内大臣一也一多喜御内侍の作也  
利家斎と號り又は秀忠の名也  
伊丹松葉封のノ

一  
立年事のわざの、のんきの  
いじめの子、立派な事の上に、  
まうでりて、子供の、おもての、  
因守り、の、心の、おもての、  
立年事の、

卷之三

02  
44

卷二

二

罪罰やくすに開闢せん。此の事は  
半世紀以上前より一の事なり  
日めぐるより是れを解説せし  
考究する所にて、ナメコが何處  
一途行年三十二十年間、而せよ  
トト吉三郎と或事の、其後又久  
トアリナニとて、シテシテの口説  
人間やセカリヤセモトホ教説の如  
事中ト年三十ニ又云々生す。一、#三五

二三五十二年正月廿二日一九九〇

サヨ

一

カタシモ高麗四年

一

リ事も高麗四年

102  
45

3/19 New York for off to N.Y.

詩言志也  
歌詠言也  
聲依永也  
律和聲也

卷之三

卷之二

此處多有水草，其根甚密，不可攀緣。水草中多有小魚，可釣之。

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

支那の事

102  
46

102  
46

卷之三

1860 May 1st  
W. H. Smith & Sons  
London

種うきよとんかんおのめにまつらすとくとく

おとことくとく

一 うかがひのよの和歌 実共 皆わくとくとく

おとことくとく

サク

一 下の處へお手手二方あるとくとく

おとことくとく

信生とくとく

102  
48

一 われは身中古事記の事とし  
わが身の事とし

一 さくらんばの事とし  
さくらんばの事とし

一 まつゆの事とし  
まつゆの事とし

國立公文書館  
National Archives of Japan

國立公文書館  
National Archives of Japan

02  
49

102

John G. Clegg

一望一望一望  
一水一水一水

一英武堂之老學傳記

萬葉集  
卷之三  
歌四百首

宋人畫花鳥草蟲

在不  
還未遠  
不不  
覺得  
德才兼備  
也

卷之三

一章寅文  
一章辰位

卷之三

中馬高流

柳家室船

足利高支

赤松源光

三義高齋。大原弘方

清雲山齋

蝶井源落共葉

鶴原吉良  
紫翁廣

萬葉堂

鶴原吉良

彦方

山前言

於井山蹊

右大年吉良

大不善

天香山房

林野高雲

重幸山房

無事

後風

萬葉文房

萬葉文房

得中

後風

玄基

玄基

玄基

玄基

玄基

玄基

一 真那・落葉一葉者年天麻子・其葉

内 深山中一叶而  
過

接門參拜者甚多信國今後當

事

一 通之葉一葉者年天麻子・其葉

事

一 通之葉一葉者年天麻子・其葉

事

一 通之葉一葉者年天麻子・其葉

事

一 通之葉一葉者年天麻子・其葉

事

國立公文書館  
National Archives of Japan

國立公文書館  
National Archives of Japan

102  
53

留侯論  
一  
素不二事。長安行氣，以爲之師。急擊項王，以成其名。  
其後漢室大興，而留侯亦功列漢室。雖曰初以力取名，

此磨又名大氣果僅草少一寸  
水枝葉多空心細枝及子叶  
不補以力而得者亦無氣之物也

の水を水一山の山の  
水を水一山の山の  
水を水一山の山の

連用西子一ノ歳の半をもとより  
西子のつゝいぬは死にぬる所にて  
那義方の御事と申すが如く此處に

洪武御文

新編元集卷之二十一

卷之三

102  
54

卷之三

卷之三

一  
五  
事  
亦  
同  
老  
弱  
者  
大  
能

トニテアリ。御事大能不一ノ事。仰及本主  
音頭。方より御名下二三事。正小。年。内。十。  
若元の御傳。御名。御事。御事。御事。御事。御事。  
於中事。御事。御事。御事。御事。御事。御事。御事。  
主事。御事。御事。御事。御事。御事。御事。御事。  
御事。御事。御事。御事。御事。御事。御事。御事。

卷之六

一  
萬  
卷  
之  
中  
有  
此  
書  
者  
不  
在  
少  
也  
其  
中  
之  
文  
字  
皆  
是  
大  
师  
之  
真  
言  
也  
故  
名  
之  
曰  
真  
言  
經

112

卷之三

一  
清江先生集

卷之三

102  
55

明月夜半  
雲之大也人之終  
其物也其事也其事也其事也  
子始之謂也。然一乃力之曰根  
乎一未得乎方也方也方也方也  
意處也也也

沈明倫  
亦喜

此平田三中川者地名也  
不直有水之少者也  
朝氣石頭多水故一而  
三作水也即此其義也

國立公文書館  
National Archives of Japan

國立公文書館  
National Archives of Japan

ナニ

三

三

三

02  
56

故嘗為之移  
修其廟宇以  
祀之。今其子  
孫猶有之。而  
其子孫之子  
孫也。則已無

主とくまテ、義理もどりがと本筋れ  
幸也行けやうに御用事はるを有難  
てありて、津路行處かのう一弱い  
行者也。行者とも考へ事所筋道す  
行者也。

用作と之爲めにうき方半りがる。是れ中空、  
あたへ  
宣りす。行ひ

三歳をまことひ  
以テ其の年號奉念用事事に付  
之ニシテ何り古リサニシニ  
利根相立也。事務同様事外復不  
往内不取入

卷之三

八十一

卷之三

心はかくも爲めに  
七日後にはまのや  
和洋風の洋服を  
車から鳥の木の下に此處で  
船の頭に立つてゐる風が如何にも  
船の頭に立つてゐる風が如何にも  
船の頭に立つてゐる風が如何にも

102  
57

102  
58

一  
至為利三力用不當矣今老矣士  
力衰弱以竹內之書亦可於中

大清

一  
白居易詩集卷之三  
此草高車第  
宋玉賦  
多詠此  
望飛鴻  
興亡  
事  
之  
意  
懷  
古  
春  
江  
水  
東  
流  
不  
復  
回  
此  
身  
已  
老  
知  
不  
可  
留  
悲  
歌  
自  
古  
人  
死  
如  
草  
木  
一  
枯  
黃  
矣  
誰  
知  
不  
復  
生  
也  
但  
使  
我  
生  
前  
能  
作  
詩  
勝  
此  
人  
已  
足  
矣

此年夏月  
予嘗與人  
游於西山  
其山有石  
高數丈  
其形如人  
立於山頂  
望之如仙  
人也

一九六七年五月一日  
在川路見此題  
題寫於左邊  
一九六七年五月一日  
在川路見此題

卷之三

21. 19. 17. 15. 13. 11. 9. 7. 5. 3.

卷之三

102  
59

卷之三

John D. Clegg

卷之三

1. *Thermosphaeroma* — *Thermosphaeroma*

其後數日，有司奏：「臣等聞之，人主之興也，必於安樂；其敗也，必於危難。故曰：『知安而忘危，則安矣；知樂而忘憂，則樂矣。』」

一  
北是秦之地也  
如前作行  
東南者也  
而此之行者  
亦爲之行者也

才子  
少卿  
之  
詩  
集  
卷  
之  
一  
七  
十  
三  
年  
己  
未  
歲  
夏  
月  
丁  
巳  
日  
作  
于  
京  
都  
東  
都  
學  
院

春  
生  
水  
行  
内

庚午正月廿四日  
和布  
心

102  
60

ウス

口

口

サフ

心

心

革ヌ

心

心

白鳥  
鶴

口

口

御劍

口

口

牛糞 菜

口

口

トヨシ 菊

心

心

米三斗半

口

口

牛糞金子留

口

口

一斗半

口

口

不

口

口

不

口

口

不

口

口

不

口

口

不

口

口

三月の事中時共ハ板屋清之

102  
61

廿年

廿年

廿年

一、酒三斗。力。

一、石馬上馬。口宣之奉。空。主。馬。馬。馬。

一、所。大。前。主。馬。馬。馬。馬。馬。馬。

塞山

吉野山

吉

塞

翼

隆

吉言院

廿年

一、酒三斗。力。

一、口宣。馬。馬。馬。馬。馬。馬。馬。馬。

廿年

一、酒三斗。力。口宣。馬。馬。馬。馬。馬。馬。馬。

酒三斗。力。口宣。馬。馬。馬。馬。馬。馬。馬。

廿年

吉

102  
62

102  
63

## 廿二

一 遇三毛子り一ノ事の間あ  
一 田口の事トニテ事前充氣済一ノ事ナガ  
一 過去状況二方トニテ其様な事並  
有候事

一生筋少少の事多手に於て事前充氣済事後事  
候事忙止事前充氣済事後事候事

## 廿三

とし

一 事前充氣済事後事候事

三事

一 事前充氣済事後事候事

一 事前充氣済事後事候事

一 事前充氣済事後事候事

一 事前充氣済事後事候事

卷之三

102  
164

手に持てば、之よりかは子細。  
衣裳外す事ナシ也。

一  
是考ら桂言傳とシテアリ  
四  
門詔第十三年是之ニ至る事ハ作の清謹  
一  
某時ノトヨ河内守吉通ニ  
四  
之ノ由來未だ考究ノ事也。室町ノ代  
三  
多有能才子也。人所云清謹者也。故  
二  
事之至三空也。因之ニシテ  
二  
事之成之。今御書院御傳也。

也。之以是人深以事為役。又以自得者。  
亦在事為役。大官居上。則時之事為役。可  
謂事本。不作事。之。事。如。也。子。也。  
事。之。事。如。也。子。也。事。之。事。如。也。子。也。  
事。之。事。如。也。子。也。事。之。事。如。也。子。也。  
事。之。事。如。也。子。也。事。之。事。如。也。子。也。  
事。之。事。如。也。子。也。事。之。事。如。也。子。也。

廿四  
一松迎客萬山青  
人強力去行

昌黎先生詩卷之二

102  
65

ノリタケノコ

茶

一 告白ノリタケノコ  
一 茶葉ノリタケノコ  
一 湿度ニ依ルニテ  
一 過度ニシテ  
一 田舎ノリタケノコ

一 田舎ノリタケノコ  
一 田舎ノリタケノコ

一 田舎ノリタケノコ  
一 田舎ノリタケノコ

苗子茶

一 木製ノリタケノコ

六月廿二日  
午後四時半  
晴

晴

晴

晴

晴

晴

晴

晴

晴

晴

晴

晴

晴